沖縄支援カレンダー 2022　琉球の聖なる自然遺産「宝物の島」どう守り、どう引き継いでゆくのか

世界自然遺産に登録された琉球諸島の貴重な動植物の写真を使用したカレンダーで、定価は税込1,100円（送料別）。収益金の一部は沖縄支援にあてられます。撮影は元琉球新報の「自然を愛する報道カメラマン」山城博明さんにご協力いただき、沖縄の魅力満載のカレンダーとなっています。沖縄支援募金（1口1,000円）も募集しています。

沖縄戦証言DVD　「目の前に戦（いくさ）がやってきた」古堅 実吉

当時、沖縄師範学校予科生の15歳で少年兵軍事組織「鉄血勤皇隊」に召集され、凄惨な沖縄戦体験をした元沖縄選出衆院議員の古堅実吉（92）さん。「命を削ってでも伝えたい」沖縄戦の真実を、現場も訪れながら語った迫真のDVDです。
定価税込2,200円（送料別）

（株）たびせん・つなぐ
〒101-0064　東 京都千代田区神田猿楽町1-3-1北村ビル302
TEL:03-5577-6300　FAX:03-5577-6310
eメール:info@tabisen-tsunagu.com
web:https://tabisen-tsunagu.com

申 し 込 み 票（電話、ファックス、メールで）

カレンダー	部希望	DVD	枚希望	募　金	口希望
おなまえ（フリガナ）					
住　　所	〒		電話	携帯	
メールアドレス					

2021.12vol.19
料金後納
ゆうメール
たびせん・つなぐマガジン
tsu・na・gu

沖縄の本土復帰 50 年を前に

いま沖縄が向き合う現実
—知って、ともに考えましょう

沖縄の本土復帰50年とは
第2次世界大戦敗戦の1945年から米軍は沖縄を占領・統治し、27年後の1972年5月15日にようやく沖縄の施政権は日本に返還されました。しかし、復帰後も米軍犯罪をはじめとする深刻な基地被害は続き、今に至っています。

やんばるの森上空を飛ぶオスプレイと、それに抗議するかのように叫ぶヤンバルクイナ（合成、いずれも2016年・山城博明撮影）

目　次

◆「いま」を知るための「これまで」のこと　藤原 健さん…… 1〜2P
◆辺野古からのリポート　抗議船船長・金井創さん …… 3〜4P
◆辺野古への土砂搬入問題　藤原健さん …… 5P
◆南西諸島へのミサイル部隊配備・増強❶
　奄美大島　中原貴久子さん …… 6P
◆南西諸島へのミサイル部隊配備・増強❷
　宮古島　上里清美さん …… 7P
◆南西諸島へのミサイル部隊配備・増強❸
　石垣島　藤井幸子さん …… 8P
◆南西諸島で進む軍備増強 …… 9〜10P

▶ヘリパッド建設に反対するN1ゲート前で、機動隊の警告スピーカー騒音に耳をふさぐ島袋文子さん（2016年・山城博明撮影）

「いま」を知るための「これまで」のこと

藤原　健

◎筆者プロフィール　毎日新聞大阪本社社会部長、同編集局長などを歴任。2006年「戦後60年報道」で「平和・協同ジャーナリスト基金大賞」を受賞。16年沖縄に移住。19年『魂（マブイ）の新聞』出版で沖縄大学大学院の「現代沖縄研究奨励賞」受賞。20年『終わりなき<いくさ>～沖縄戦を心に刻む』出版。現在、琉球新報客員編集委員及び毎日新聞客員編集委員。16年から琉球新報でコラム「おきなわ巡考記」を、毎日新聞で21年から「『復帰50年』の群像」をそれぞれ連載中。

原点は沖縄戦

きょう（2021年11月19日）の新聞に目をやる。琉球新報の1面トップは物資を運ぶオスプレイの写真付で「普天間でつり下げ訓練／米軍、市街地近くで異例／オスプレイ使用、住民苦情」と。そのすぐ下には「きょうから大規模演習／自衛隊／県が民間港使用許可」の記事。

前日は同じ琉球新報が社会面トップで「自衛隊大規模演習　重なる大戦前／日本軍が沖縄戦酷似訓練／1914年　首里拠点に『侵入軍』迎撃」と、沖縄戦研究者の石原昌家・沖縄国際大学名誉教授の指摘を報じている。大げさではなく、沖縄の「いま」は、もう新しい戦前のようだ。

その「いま」を知ろうとすれば、なぜこうなったのか、「これまで」のことを踏まえる必要がある。6年前、この地に移住して、ますますその想いが強くなっている。

「いま」の原点は、沖縄戦だ。沖縄戦の住民被害に着目すれば、その背景に琉球併合以後の日本政府の沖縄への差別構造も見えてくる。

――と書けば、「ああ、またか」という「大人」で「現実的な」もの言いが聞こえそうだ。沖縄が「本土復帰」して50年を迎えようとしている。戦後も75年を過ぎている。世界情勢も様変わりしている。もういい加減、沖縄戦のことを持ち出すのはやめにしないか、と。しかし、果たして、そうか?

事例を書く。それは、戦没者の遺骨が眠る沖縄本島南部の土砂を辺野古新基地建設の埋め立て工事に使うことの非道にもつながる史実である。

「生き抜いて」の思いに

那覇市の首里城構内の物見台近くに、「留魂壕」の跡が残されている。沖縄戦に備え、沖縄師範学校男子部の生徒が掘った。壕の名は「身はたとい　武蔵の野辺に　朽ちぬとも　留めおかまし　大和魂」という吉田松陰の辞世の句にヒントを受けた師範学校の教師が命名した。ちなみに、勇ましさを誇示したこの教師は、沖縄戦の前に出張名目で九州の故郷に逃げ帰っている。

早足で5分足らずの首里城地下には、沖縄戦を戦った日本陸軍第32軍の司令部壕があった。生徒達は「留魂壕」で弾雨をしのぎながら司令部の指示で伝令に走り、弾薬を運び、「切り込み」攻撃にも加わった。

▲留魂壕（2017年5月20日・筆者撮影）

「留魂壕」には、「生徒と共にあるのが教師の役割」とした野田貞雄校長もこもった。野田校長の在宅当番だった師範学校女子部の内間シマさん（「シマ子」の表記もある）ら4人のひめゆり学徒も加わった。その内間さんが、同郷で男子部の大田昌秀少年に壕の入口で声を掛けた。戦況悪化で壕からの撤退が迫るあわただしい中で残された言葉である。

「男子部の人たちは、いつも死ぬことが最上だと口にしています。私はそれはいけないと思います。死んでしまったら、おしまいではありませんか。生きてください。生きて、生きて、生き抜いてください」

内間さんは「口数が少なく、誠実な人だった」（ひめゆり平和祈念資料館編集『墓碑銘』）。なぜ、あのとき、「生き抜く」ことを訴えたのか。それを知る術はない。この言葉を発して半月後の1945年6月17日、本島南部の糸満を避難中、砲弾に大腿部をえぐられ、介抱する同級生らに「もう、だめだから、あなたたちは先に行って」と言い残したのが最後になった。泣く泣く離れた同級生に看取られることもなく、消息を絶ち、18年の短い生涯を閉じた。

内間さんの声と想いが継がれているのは、「生き抜いて」の言葉を心に刻んだ大田少年、後に沖縄県知事となる人が、沖縄戦の意味を問い続ける中で記録していたからだ。大田知事は、この記録以外に内間さんのことを語ることはなかったが、預かった県の姿勢として「平和行政」を推進した。

糸満市摩文仁に展開する「平和の礎」の建立は、その業績のひとつだ。内間さんの名前は礎に刻まれてはいるが、遺骨はまだ、南部の土の中にある。

つながる時空

もうひとりの名前を忘れない。戦災孤児の男の子「こうちゃん」である。

その4歳（5歳ともいう）の短い生涯は、ひめゆり学徒隊の引率教師で、生き残った戦後、戦没した教え子たちのことを弔い続けた仲宗根政善さんが日記に書き記している。

こうちゃんは戦争で親を失い、司令部の壕に迷い込み、（学徒隊が配備された）南風原の陸軍病院に連れて来られた。親代わりに世話をした看護師グループの女性が、こうちゃんを外で用便をさせている最中、砲撃を受けて亡くなった。こうちゃんは奇跡的に助かったが、その後、疲れと飢えで避難した壕で動けなくなった。看護師グループや学徒隊は、こうちゃんに死が迫ったことを察知したが、手のほどこしようがなく、こうちゃんを残して壕を出た。

こうちゃんのその後の行方は分からない。壕の中で、あるいは壕から這い出したところで、果てた。小さな遺骨はいまも、南部の土に眠る。

この土を米軍の新基地建設に使う計画とは、内間さんやこうちゃんの、他にも未回収の遺骨の尊厳を顧みないことと同義である。「いま」は「これまで」に、時空を超えてつながっている。

（5面に関連記事）

辺野古からのリポート

工事船がひしめく大浦湾

金井　創
（日本キリスト教団佐敷教会牧師
辺野古抗議船船長）

不屈と木乃葉蝶

抗議船「不屈」の船長として

私は辺野古新基地建設に抗議する活動で船長をしています。2004年から始まった抗議の座り込みも17年になります。私は2007年から参加していますので、それでも14年です。長い闘いになりました。現在の土砂埋め立て工事は2014年から始まっています。

2014年以来、工事現場に資材が運び込まれる米海兵隊基地キャンプ・シュワブのゲート前には座り込みのテントが常設され、県内各地から座り込み参加者のためのバスも運行されています。まさに島ぐるみの抵抗が続けられていますが、県民投票で反対の意思表示をした民意も無視して埋め立て工事は続けられています。

埋め立て用の土砂は名護市西海岸にある鉱山から採掘され、本部町塩川港、名護市安和桟橋の2か所から船で大浦湾まで運ばれてきます。この過程で工事の大幅な変更をしているにもかかわらず、知事の許可を得ておらず、またいくつもの条例に違反していますが政府はお構いなしです。運ばれてきた土砂は赤土が大量に含まれていて、これまた違反なのですが、2か所建設された護岸から陸揚げされています。これでも工事のペースは遅いため、現在3か所目の護岸が作られています。そのため周辺にあるサンゴが真夏の高水温期に移植されるという無謀な作業が強行されました。このように自然環境を破壊し、法律・条例に違反した工事に抗議するため、私は海上で行動してきました。

海上行動は船とカヌーのチームで構成され、一体となって活動しています。私の本業はキリスト教会の牧師ですから、辺野古に行けるのは良くて週に2回です。沖縄南部の南城市から70km離れた辺野古まで車で通っています。

2014年に当時勤めていた沖縄キリスト教平和研究所で全国募金をして新船を購入しました。これに戦後一貫して民衆の側に立ち続けた政治家・瀬長亀次郎さんにちなんで「不屈」と名付け、私が責任をもって管理しています。

「木乃葉蝶」と「やいま」

2018年12月、名護市安和桟橋からの土砂積み出しが始まりました。これに対しても現地の海上で抗議するため、現在は週に3回安和桟橋で、そして同じく週に3回辺野古・大浦湾で活動しています。安和桟橋で行動するときは辺野古からその日必要な数のカヌーを運ぶのです。名護市街地を経由する22kmのコースです。また辺野古で運用している船はそこまで運べませんから、安和桟橋行動用に陸上運搬できる小型の船を2隻用意しました。

1隻は私が管理している「不屈基金」で購入したジェットボートです。これに「木乃葉蝶」と名付けました。小さく軽やかに動き回るところから蝶の名前を船名にしたかったのです。なおかつ沖縄固有の蝶にしたかったのは、私たちの活動が反対運動を押しつぶして建設が強行された高江の米軍ヘリパッドにも抗議し、高江の活動と連帯していることを表したかったからです。そこで高江に住んで抗議活動を続けている蝶類研究者の宮城秋乃さんに相談し、美しいコノハチョウを教えてもらい、この船に「木乃葉蝶」と名付けていただきました。

もう1隻はヘリ基地反対協議会が購入したゴムボート「やいま」です。「やいま」とは八重山地方を指す方言です。宮古島と八重山地方の石垣島・与那国島で進む自衛隊基地建設と部隊の増強。特に石垣島と宮古島では市民の抗議活動が続けられています。その活動と辺野古の活動は連帯していますという思いを込めて「やいま」と名付けました。もう1隻あれば宮古島を表す名前を付けたのですが、今回は代表して「やいま」にしました。

このように私たちの活動は各地で軍事基地に抗議する市民運動に連帯して行われているのだということを、船の名前で表しています。

私たちの行動の大原則は非暴力です。しかし海では取り締まりに当たる海上保安庁によって、私たちの仲間が数多くけがをさせられてきました。一番新しいところでは4月15日にカヌーメンバーの一人が海保の高速艇に衝突されて1年以上の後遺症が残るけがを負わされました。海保はけがを負わせたことを認めないため、これに対して国家賠償訴訟を起こし、いま公判が始まったところです。

海上行動には常に危険が伴います。毎日、安全には注意を払いながら、しかし基地建設を食い止めるために海上行動チームは今後も諦めずに活動を続けていきます。

安和桟橋行動のやいま（手前の小さいゴムボート）（写真はいずれも筆者撮影）

遺骨に向き合う 具志堅 隆松さん

藤原　健
（琉球新報客員編集員及び毎日新聞客員編集委員）

遺骨収集ボランティア「ガマフヤー（ガマ=自然壕を掘る人）」の具志堅隆松さんの活動に注目している。これからもそうだ。ハンガーストライキなど命を削るその行動と想いが、沖縄発の国に向けた大きな問題提起となる状況をつくり出そうとしているからだ。

いつもは温厚な具志堅さんはもう、怒りと憤りを隠さない。戦没者の血、肉が染み込み、骨片が食い込んでいる沖縄本島南部の破砕土、岩ズリが辺野古の新基地建設に使われようとしていることに対して、である。この40年近くの間、ボランティアで戦争遺骨の発掘・収集を続け、遺骨は無言の証言者であることを実感している。

昨年11月3日、具志堅さんの案内で、糸満市米須の丘陵地を訪れた。「ひめゆりの塔」から車で5分、「魂魄の塔」に近い石灰岩採掘場。大きな岩の下の土中でその2日前、大腿骨の一部や歯が付いた下あごの骨などを見つけたばかりだ。具志堅さんはため息をつく。「案の定、です。この一帯に、今も戦没者は眠っている」。その遺骨の存在を確認せず、収集も放棄する。このままでは、単なる土塊として処理されてしまう。

こうした状況を「戦没者への冒瀆」として国会で追及された菅義偉首相（当時）は「関係法令で定められた採掘場から調達される」と短く答えた。だが、問題は採掘の手続きではない。遺骨については、「戦没者の遺骨収集の推進に関する法律」（遺骨収集推進法）がある。2016年に施行され、8年間を「集中実施期間」として「計画的かつ効果的に」必要な措置を講じることになっている。今は、法の趣旨を有効に活かさなければならない時のはずである。

▲糸満市で土砂を調べる具志堅隆松さん
（2020年11月3日・筆者撮影）

具志堅さんは、砕石場から臨める摩文仁の丘に目を移し、語り始める。

「防衛局は、ここが激戦地で、米兵を含む戦没者の遺骨が地中に眠っていることは当然、つかんでいるはず。あるいは、把握していないと言い繕うのか。いずれにしても、遺骨への想像力に欠け、人間の道を外れている」。遺骨となって見えない土の中に放置されていた戦没者を、再び見えない海底に沈める。こんな形で永久に葬り去る。二度殺すのと同じだ。尋常ではない。

具志堅さんと戦没者遺族の想いを、どう受け止めるのか。品格も含めた国の質が問われている。

南西諸島への
ミサイル部隊
配備・増強

❶奄美大島

中原貴久子さん
奄美自然の権利訴訟に取り組む。現在、辺野古新基地建設海上工事現場へ通う。

生物多様性の島へのミサイル配備

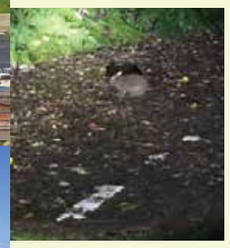
世界自然遺産登録となる国内で2番目に大きい奄美大島。そう聞いてどのような島を思い描くだろう。確かに亜熱帯の森も、河口にマングローブ林の広がる川も、青く透き通ったサンゴ礁の海も、ため息が出るほどに美しい島だ。だが海へ潜ると赤土汚染で見事なサンゴ礁は破壊されつつあり、河川はコンクリート化され、森ではパルプ用材として大規模な伐採を目にする。

奄美群島は沖縄と共に戦後の一時期米軍統治下にあり、他の地域より復興が遅れたとの認識から『奄美群島振興開発特別措置法』によって、国庫補助率の高い公共事業が現在に至るまで続けられている。予算規模は年間およそ300億円。事業により奄美群島のインフラは整ったが、産業別人口統計上も土木建築業が増加し「基幹産業は公共事業」とまで揶揄されるようになった。

殆ど知られてないが奄美大島へは2カ所の自衛隊ミサイル基地も配備済みだ。この自衛隊ミサイル基地は国内最大規模で、現在も瀬戸内町分屯地へは、延長250メートル×5本のトンネル状弾薬庫が建設中だ（2024年完成予定）。

奄美大島と徳之島には国の特別天然記念物指定第1号であるアマミノクロウサギが生息している。“生きた化石”とも称され、絶滅も危惧される。瀬戸内町のミサイル基地建設予定地はクロウサギの生息地だったが、クロウサギを他所へ移動し建設された。また基地の周囲は国立公園に指定されており世界自然遺産登録地でもある。

奄美大島は島の成り立ちから生物分布境界線の南に位置し、固有種が多く特異な野生生物が生息する生物多様性顕著な島だ。国土面積の0.2%に満たない奄美大島には国内全体の生物種のうち約13%が確認されている。このように危うい島嶼生態系でもある奄美大島へ、彼方の大地を破壊し人命をも奪うミサイル基地は配備された。世界自然遺産登録となったときに、奄美大島は皮肉なことに、すでに世界危機遺産となっていたのだ。



●写真
左:奄美駐屯地▲
中上:奄美駐屯地ミサイル▶
中下:瀬戸内分屯地▶
（上島啓氏提供）
※写真転載無用

▲アマミノクロウサギ（筆者撮影）

南西諸島への
ミサイル部隊
配備・増強

❷宮古島

上里清美さん
ミサイル基地いらない宮古島住民連絡会、みやこ九条の会。

宮古島を捨て石にしないで！

宮古島では2017年から陸自基地建設工事が始まり、2019年3月には陸上自衛隊警備部隊、2020年3月には地対艦・地対空ミサイル部隊、合計700人が配備されました。

宮古島の中央の野原岳には戦時中に日本軍司令部が置かれ、敗戦後は米軍レーダー基地、復帰後は空自レーダー基地となり、北東アジアを監視する巨大レーダー基地ですがそのすぐ隣に陸自駐屯地が配備されました。周辺住民には「弾薬は置かない、ヘリは飛ばさない、基地以外では訓練しない」と約束したにも関わらず、完成してみると弾薬庫が造られて危険な弾薬が搬入され、公道を軍用車両が走行訓練しています。

さらに島の北東に位置する保良地区にも弾薬庫と射撃訓練場が建設されましたが、住宅から200mも離れない場所に弾薬庫が造られ住民の不安の声があがっています。

2021年11月14日、住民に何の説明もなく海自の大型輸送艦「しもきた」が弾薬を積んで入港、住民の搬入抗議の中、弾薬を積んだ車列が上陸し公道を走って保良の弾薬庫に搬入してしまいました。配備推進派は中国が攻めてくるかもしれないとの中国脅威論を振りまき、防衛省説明会では「配備は他国の脅威からの抑止力であり、皆さんを守る為だ」との説明でした。

74年前の戦争時にも同様に「君たちを守りに来た」と3万人の日本兵が島にやってきました。南方から日本本土に北上する連合軍を島でくい止める為でした。しかし連合軍の攻撃で荷を積んだ船が攻撃された後は島に物資が一切入らなくなり、日本兵も住民も餓死とマラリヤで多くの犠牲者が出ました。

今又、「あなた達を守りに来た」と自衛隊がやってきましたが、私たちは捨て石です。

島周辺で紛争が起これば、空も海も封鎖され物資は入りません。島はたちまち飢餓の島になるでしょう。ミサイル攻撃が始まれば5万5千人の住民避難の道はありません。

島に生きる私達には、憲法九条の「武力の行使は放棄する。国際平和を誠実に希求する」しか生きる道は無く、近隣諸国と仲良くする努力こそが最も求められます。

▲海自輸送艦による弾薬輸送に抗議する住民（筆者撮影）

▼保良弾薬庫に弾薬搬入（筆者撮影）

南西諸島への
ミサイル部隊
配備・増強

❸石垣島

藤井幸子さん
石垣島に軍事基地をつくらせない市民連絡会事務局。いしがき女性9条の会。2005年、大阪より石垣に。

石垣島にミサイル基地いらない！

●環境、くらしを破壊する基地建設NO!

防衛省は、2015年5月の配備要請後、2019年3月1日の工事着工までに5回の住民説明会、着工直前の2月27日に初めて周辺4地区(於茂登、開南、川原、嵩田)との意見交換会を開催。3月の着工は沖縄県環境影響評価条例の20ヘクタールを超える用地造成に義務付けられた環境アセスを逃れるため。工事が始まると、大きな花崗岩などがゴロゴロ出てきて、その岩を削岩、砕石する騒音の被害に住民も、カンムリワシも脅かされています。弾薬庫についても住民の不安は大きい。一番近い民家、通学路まで200mです。住民の求める、地下水(水道水)や農業用水への影響調査を拒み、排水の放流先も決まらないまま、配備ありきの工事強行は、許せません。

●住民自治、民主主義が活きる市政を

市長や与党市議は、「国防は国の専権事項だ」と住民の声を無視。2018年12月に「石垣市住民投票を求める会」が、14,263筆(有権者の約40%)の署名を集め「自衛隊配備の賛否を問う住民投票」の実施を請求。議会は否決しましたが、市長には、有権者の4分の1以上の署名があれば、自治基本条例で定められた実施義務があるのに実施しません。住民投票の実施を義務付ける裁判を起こしましたが、今年8月、上告審でも不当に却下・棄却。しかし、裁判所の判断は住民訴訟の対象にならないということで、住民投票の実施義務そのものについて判断はしていません。

今年6月市議会では、自治基本条例の住民投票の条項を削除する暴挙まで。

来年2月に行われる市長選挙へ市民の声を聴く、住民投票を実施する市政へと、市民は動き出しています。

●憲法9条を活かし平和構築へ

配備されるミサイルは車載式で、有事になれば島中が戦場になり、住民や観光客の安全の保障はありません。

尖閣危機を煽る動き、中国の覇権主義的な動き、米中の対立など、東シナ海は緊張が高まっています。

軍隊は住民を守らない。沖縄戦の教訓です。私たちは、あきらめません。軍事対軍事の対立路線をやめ、平和的外交努力で尖閣問題の解決、地域の平和と安全を築く道を求めます。

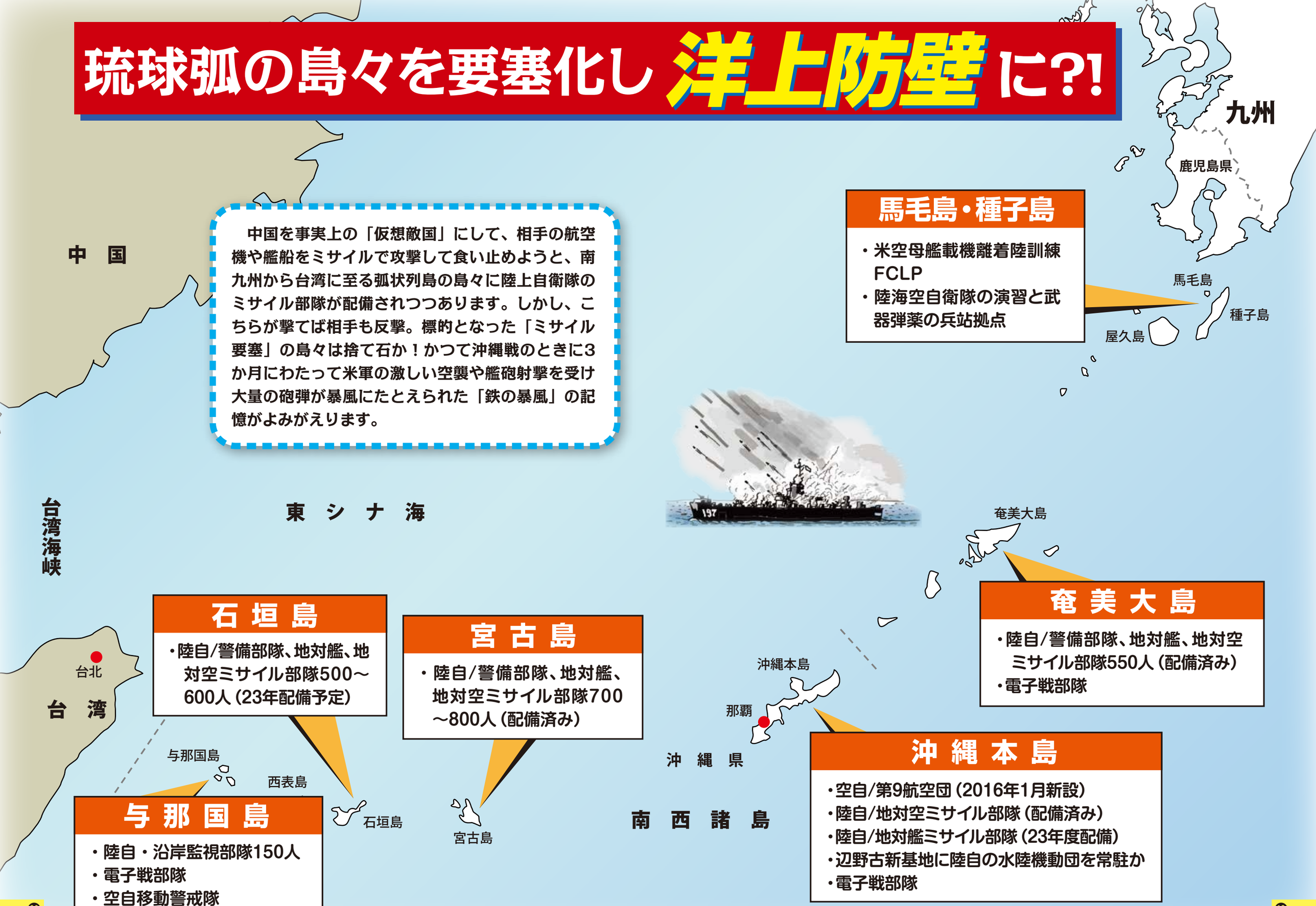
▶2021年11月21日基地いらないチーム石垣撮影。基地の左部分に弾薬庫。左の道路は通学路、集落は開南。

いしがきHP
I LOVE いしがき HP

いしがきFB
I LOVE いしがき FB

琉球弧の島々を要塞化し 洋上防壁 に?!

中国を事実上の「仮想敵国」にして、相手の航空機や艦船をミサイルで攻撃して食い止めようと、南九州から台湾に至る弧状列島の島々に陸上自衛隊のミサイル部隊が配備されつつあります。しかし、こちらが撃てば相手も反撃。標的となった「ミサイル要塞」の島々は捨て石か！かつて沖縄戦のときに3か月にわたって米軍の激しい空襲や艦砲射撃を受け大量の砲弾が暴風にたとえられた「鉄の暴風」の記憶がよみがえります。



馬毛島・種子島

- 米空母艦載機離着陸訓練FCLP
- 陸海空自衛隊の演習と武器弾薬の兵站拠点

奄 美 大 島

- 陸自/警備部隊、地対艦、地対空ミサイル部隊550人（配備済み）
- 電子戦部隊

石 垣 島

- 陸自/警備部隊、地対艦、地対空ミサイル部隊500～600人（23年配備予定）

宮 古 島

- 陸自/警備部隊、地対艦、地対空ミサイル部隊700～800人（配備済み）

沖 縄 本 島

- 空自/第9航空団（2016年1月新設）
- 陸自/地対空ミサイル部隊（配備済み）
- 陸自/地対艦ミサイル部隊（23年度配備）
- 辺野古新基地に陸自の水陸機動団を常駐か
- 電子戦部隊

与 那 国 島

- 陸自・沿岸監視部隊150人
- 電子戦部隊
- 空自移動警戒隊